

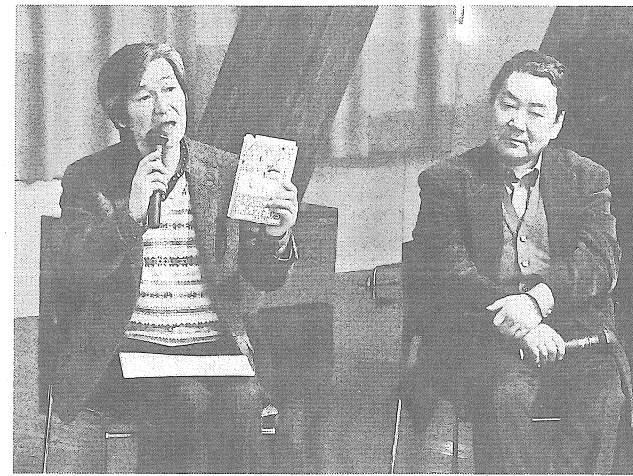
本を一冊読み終えて、次に何を読むか。本から本へつながっていく面白さを、本好きの人なら経験として知っている。好奇心にまかせてのジャンプ。哲学書から漫画に飛ぶこともあり得る。これから本を読む人へ、そのすべを伝えようという催しが11日に紫波町で開かれた。

「面白い本と出会う方法」と題したトークイベントで、紫波町情報交流館が主催した。本先、案内人は、出版社苦楽堂代表の石井伸介さん(神戸市)、岩手の書店から数々のベストセラーを生み出した一関図書館副館長の伊藤清彦さん(一関市)、川崎村立図書館(現一関市)の設立に関わった富士大経済学部教授の早川光彦さん(花巻市)。県内外から約100人が参加した。

話は、苦楽堂から2014年に発行された本への出会い方のエッセー集「次の本へ」に記された内容から展開。石井さん自身が一冊読んで次に何を読んだらいいかわからないという高校生の声を多く聞いたことが編集のきっかけで、学者、作家、ジャーナリストら84人が読書体験を寄稿した。

早川さんは、石井さんと同じ宮城県出身で高校も同窓の縁から執筆。東日本大震災の発生時、福島県の南相馬市立中央図書館に勤務しており、原発事故に直面して死を覚悟した経験を踏まえ2冊を挙げた。

震災の半年後に出合った本が「日本人の叡智」。「出る月を待つべし。散る花を追うことなかれ」という江戸時代の学者の言葉に救われたという。震災の混乱が収まらず、心の痛みを抱えていた中で



本の魅力を熱く語った早川さん(左)と伊藤さん

本から本へつながる面白さ

友人に教えられたのが、震災で卒業式を中止した立教新座高校の校長が生徒に寄せたメッセージで、「これから生きる君たちへ」に収録されている。
「いかなる困難に出会おうとも、自己を直視すること以外に道はない。いかに悲しみの涙の淵に沈もうとも、それを直視することの他に我々にすべはない」。何度も読み返し涙したという箇所を紹介し、自分にとってこれからは生きる若い人たちが希望であると語った。

会場には、さまざまな本が持ち込まれた。早川さんは、本のつながり方として「地方消滅 東京一極集中が招く人口急減」から「地域再生の経済学 豊かさを問う直す」へ、盛岡市出身の写真家みやこうせいさんの後世に残る写真集として「羊の地平線」から「藍を謳う」へなどを感想を交えて例示した。

伊藤さんは、明治大ラグビー部元監督による「前へ」、「釣りキチ三平」で知られる漫画家矢口高雄さんの「ふるさと」、灘中学校で3年かけて一冊の本を読む授業で使われた「銀の匙」などを紹介。矢口さんの漫画シリーズについては「北東北の暮らしが美しい絵で描かれ、貴重な民俗資料になっている」と語った。

ジャンプの極意とは 紫波で催し

「本との出会いを」図書館に展示コーナー
紫波町図書館では、「次の本へ」で紹介された本の展示コーナーを設けている。写真集になるテーマ、好きな著名人、巻末にある出合ったきっかけ(友達に薦められて、好きな著者ができて...)などから探す方法を提案している。

エッセーのタイトルを添えて並べられた本は、少しずつ増えて47人分。「歯を食いしばって読んだ、もう一冊の『イジメの物語』(猫の事務所)から『風の又三郎へ』、「彼らは友人同士だった」(文明の生態史観」(月曜休館)。



展示はトークイベントを前に始まり、一部は貸し出されるなど来館者の関心も高い。それぞれの思いをたどりながらもう一度本と出会う、そんな楽しみ方もありそう。展示は29日まで(月曜休館)。